

## 永井玉藻著 『バレエ伴奏者の歴史 19世紀パリ・オペラ座と現代、舞台裏で働く人々』

古後 奈緒子

題名の「バレエ伴奏者」とは、バレエのレッスンや公演リハーサルの伴奏を担う人々について、踊りながら伴奏も行ったバレエ教師や、ピアノ以前の楽器奏者を含めて研究するため、著者が設定した概念である。本書はその「過去と現在の姿」を明らかにすべく、2部7章に編まれている。第1部「バレエの歴史と19世紀パリ・オペラ座」は「過去」を対象とする資料研究。第2部は実践者への聞き取りによる、「現代におけるバレエ公演のつくりかたとバレエ伴奏者の仕事」の紹介となる。さらに1部の第1, 2, 4章と、2部第7章の後にも、第一線で活躍する実践者のインタビューに基づくコラムが挟まれる。全体で、表舞台の輝きを支える人々の働きが、多角的な像を結ぶ構成である。

題材は決して一般向きではない。資料体もその分析・叙述も、先端をゆく学術研究に基づく。だが注を省き、資料をリストや表で要所に配し、巻末に用語集を置くといった編集が、本書を広い関心に訴える良書にしている。その魅力は、「バレエチャンネル」で多くの愛読者を持つ著者の語り口にも負う。冒頭から、《春の祭典》のリハーサルにおける証言、ドガによる稽古風景のデッサンを入りに、読者は探求の根幹をなす問いへ導かれる。続いて第1章の冒頭は、現代のパリで絵画の殿堂を背に立つ位置から始まり、歴史の舞台への道のりが活写される。こうして手を引くように案内されるアーカイヴでは、有名だがよく見られてはこなかった資料や、舞踊研究者が活用してこなかった資料が、音楽学者の手で読み解かれてゆく。

1部の内容について、舞踊史上の関心に照らして見ておきたい。序章で新しい研究対象が鮮やかに切り出された後、第1章では、背景となるパリ・オペラ座と「一心同体」の19世紀バレエの歴史が語られる。この章は一般に知られたバレエ史の手際よいおさらいだが、舞踊史再考後の叙述の更新としても興味深い。例えばバレエおよびオペラ座の変化が、封建社会から革命後の変動期へ辿られる過程では、これまで繰り返されてきたように、王立から民営化へと単純に線は引けない。パリ・オペラ座が数世紀にわたり蓄積してきた資料体（リダクション譜、レペティトゥール譜、バレエ教則本の中の楽譜類から、オペラ座の規則集、

雇用契約書、会計簿、舞台監督日誌など）は、ミシェル・フォーコーが示した複数の系が織りなす関係の叙述を可能にしている。第2章「バレエ教師は伴奏者—19世紀前半までの場合と音楽」、第3章「認められた副業—19世紀後半のバレエ伴奏者たち」では、バレエ教師の専門分化、オーケストラの弦楽器奏者に現れたレペティトゥールの雇用形態の変化、ピアノ伴奏者などの系が示される。一方で、これらの相関するところには、研究史的にドラマチックな成果も見られる。第4章「弦楽器かピアノか」では、リハーサルでピアノが用いられた最初は？という問いがよいよ検討され、《二羽の鳩》とする19世紀バレエの権威による定説の資料的根拠が正されるのだ。系譜的な資料の読みは、第5章「最後の弦楽器伴奏者、最初のピアノ伴奏者」にも活かされる。1875年に移転したオペラ座で、弦楽器奏者のうち誰が最後までレペティトゥールを務めたか、また、その穴を埋めていったピアニストは誰かが特定され、それぞれのプロフィールが描き出される。歴史において「最初」や「最後」、さらに「ない」と言うため、数世紀にわたる資料の読み込みにとれほどの時間が必要なのだろう。ここで、弦楽器がピアノに交代した理由の推測も控えられているのは、一般読者としては残念に思ったが、研究者の矜持であろう。謎は謎のまま残されている。

とはいえ、連れてゆかれた舞台裏で、読者は何も手にしないのではない。冒頭で画家の視点を借りて誘導された先は、表から隠された裏というより、「稽古という日常」であった。言い換えれば、煌びやかな舞台の裏で日々行われている学び、輝かしい一瞬のための準備のプロセスである。その奥深さは、舞台裏を生きるプロの体験を扱う第2部やコラムに知ることができる。また舞踊史的には、モダニズムの歴史叙述に作用する序列構造や価値体系を相対化する視点も得られる。視覚優位のスペクタクルにあっては、後景化しがちな音楽や音楽性への注目もあるだろう。「あとがき」で著者は、留学中、パリ・オペラ座の公開レッスンで耳を奪われた、バレエ・ピアニストの演奏について述べる。彼らの仕事に光をあてる本書もまた、ダンスにおける音楽の大切さに目を開き、音楽への感性を耕してゆくきっかけとなるだろう。

(音楽之友社、2023年1月刊行)

# 川野恵子著 『身体の言語 十八世紀フランスの バレエ・ダクシオン』

森 立子

バレエ・ダクシオン理論を軸とする十八世紀のバレエ改革は、舞踊史上の一大転換期とされ、舞踊史の通史的記述においては言及必須の対象となっている。しかしながら、美学史の文脈の中で、この「バレエ・ダクシオン」という運動がどのような意味を持つものであったのかについては、これまで十分に論じられてこなかった。本書はこのような美学・美学史領域における研究の現状をふまえ、十八世紀フランスのバレエ・ダクシオンを、同時代の美学理論、言語論、演劇論、さらに十七世紀のメネトリエの美学理論、バレエ論との関連性にも注目しながら考察するものである。

本書において著者は、十八世紀のバレエ・ダクシオンの特徴を〈テキストの身体化〉と定める。そして、舞踊においてなぜテキストを身体化する必要があったのかという点について、技術の位階概念が大きく関与していたことを示す。すなわち、西洋思想にあっては、伝統的に言語と身体との間の截然たる切り分けが存在しており、言語に特権的な地位が与えられていた。そういった中で、身体性が顕著である舞踊芸術がこの位階を上昇するためには、「身体が言語でありうることを証明すること」(p.23)が必要であったという。バレエ・ダクシオンはまさにこの「証明」の運動として捉えうるものであり、それは、身体と言語とが隔絶した存在とみなされてきた西洋思想の伝統に照らすならば、「逆説的かつ反抗的な性格」(p.20)を持つものであるとも解釈出来る。

そしてさらに著者の問いは続く。一般的に、舞踊による表現はテキストによる表現に比して「不明瞭」であるとも言えるが、そうでありながらもなぜバレエ・ダクシオンは〈テキストの身体化〉という困難な試みに進んでいったのか。この点について著者は、「近代経験主義の確立にともない、言語観の刷新が試みられた十八世紀を背景に、バレエ・ダクシオンは、西洋の伝統的言語観と異なる新しい言語観を追求していたのではないか」(p.25)という仮説を立て、本書を通じてこの仮説の有効性を立証していく。この新しい言語観とは、「不明瞭」であることに積極的価値を見出すものであり（「言語」が独創的であるからこそ不明瞭であり、不明瞭であるからこそ受け手にそれを理解するための能動的な関与を要請する。こうして「観客と作者が相互にやりとりをする動的な舞台空間」(p.260)が立ち現れる）、著者はここに近代的芸術概念との呼応を見ている。

冒頭にも記したとおり、本書においては美学理論、言語論、演劇論、舞踊論と、複数の領域を視

野に収めた議論が展開されている。全体は三部から構成されており、「第一部 十八世紀フランス言語論の動向—言語概念の拡大と芸術」ではコンディヤックの言語思想と、ディドロの演劇改革および言語歴史論が扱われる。この第一部において、伝統的な言語観を刷新する動き、言い換えれば「『言語』とみなされる対象の範囲の拡大」(p.34)の動きが十八世紀に現れたことが、コンディヤックおよびディドロのテキストの緻密な読解とともに示される。

次いで「第二部 十七世紀バレエ・ダクシオンの芽生え—舞踊の模倣芸術化」では、十八世紀のバレエ・ダクシオンに一世紀先立ってバレエ論を展開したメネトリエに焦点が当てられる。ここでは彼の「像 imageの哲学」とバレエ論とが考察の対象となっており、世俗的な像の価値を打ち出す「像の哲学」に立脚しつつ、メネトリエが「悲劇を範型とする詩学の体系を感性的像に関わる制作学に組み換える」(p.129)バレエ論を展開したことが論じられる。

さらに「第三部 十八世紀バレエ・ダクシオンの興隆—新しい言語の追求」では、前述のメネトリエの「像による模倣」というバレエ観を引き継いだ理論家として、カユザックとノヴェールが採り上げられる。カユザックは産出的な自然の創造的模倣によって成立する「ダンス・アン・アクション」を主張し、しかもその創造性が制作者と観客との相互関係から立ち現れるのものであるとする。このような制作者／観客の相互性に立脚する作品概念の延長線上に、ノヴェールは「イリュージョン」概念を提示し、「これによって、カユザックにおいて可能性が示唆されるにとどまっていたダンス・アン・アクションが真に実現される」(p.194)こととなる。

本書は、先行研究の丁寧な検討と、研究対象となるテキストの精密な読解・解釈に支えられた、学術的価値の高い研究成果である。紙幅の都合上、すべての重要な論点を列挙することは出来ないが、舞踊史学（特にノヴェール研究）の立場から評者が特に関心を持った部分を二点挙げる。一つは、メネトリエの「構想の統一」に関する部分。ノヴェールも著作の中で、バレエ作品に「構想の統一」が必要であると主張しているのだが、その具体的内容については何も語っていない。しかし本書で詳述されているメネトリエの議論は、このノヴェールの「構想の統一」を考えるための鍵を提供するものとなっている。そしてもう一つは、ノヴェールにおける「統一概念としてのアクション」が厳密にはさらに二分される（展開や進行をもつアクション／一場面におけるアクション）と論じている部分である。

なお全くの蛇足ながら、「十七世紀に流行したオペラ＝バレエ」(p.16)という記述の下線部分は誤記であると考えられることを指摘しておく。

(水声社、2024年2月20日刊行)